

みんなでつくろう！おすすめ図書データベース

- 教師用ガイドブック -

● はじめに

・子ども達の図書離れが深刻な問題となり、活字に親しみがない子どもたちが急増している中で、学校図書室のあり方をもう一度検討する必要があります。本実践は、学校図書への親しみや有効活用を促すために、学校図書データベースの作成を共同して取り組むものです。

・実際にこのような取り組みを実践してみると、目的をしっかり持った子ども達の活発に活動する様子が見られるはずである。目的意識を持って学校図書に関わることによって、図書離れに少しでも歯止めがかかれば幸いである。

・データベースは、コンピュータの持つ計算能力をフルに発揮できる分野であり、コンピュータ利用の利便性を直接感じることでできるものである。データベースの特性を理解し、デジタル化された情報の有効性や取り扱いを実際に学び、その検索方法を習得することは、情報活用能力の育成に大きな影響を与えるものであるといえます。

● 各ステップにおける留意点

STEP 1 <みんなの図書室利用状況や貸出し状況を知ろう！>

○ 図書利用状況のアンケートをとったり、話し合いを行い、図書室の現状を再認識する。

・事前に図書委員会や図書担当の先生達から、図書室利用の実情についての聞き取りをしておくことが必要です。

・地域の図書館を訪問して、子ども達が気楽に利用できる施設なのか、実際に子ども達が来て利用しているのか、図書検索システム等はあるのかなどの情報を得ておく必要もあります。

STEP 2 <みんなの知りたい図書情報にはどのようなものがあるのか考えよう。>

○ データベースの見本を紹介する

・子ども達にデータベースの完成イメージを持たせるために、この時点でサンプルを紹介しておく必要があります。準備できない場合は、公立の図書館にある図書検索システムを紹介するのもいいでしょう。

○ データベースの項目を各自で考えてみる

・実際に町の図書館に出向いたり、授業中に図書室に行ったりというような活動を取り入れるようにしたい。また、普段は目を向けない本の裏側やあとがきなどに注目し、本にまつわる情報とはどのような

ものなのかを考えてみます。全体的に、図書の本に親しませることを重点にして取り組みましょう。

- ・公立の図書館や学校の図書室の本の置き場や分類方法にも注目させましょう。

- 全員でデータベースとして作成したい項目を出し合い、どうしてその項目が必要なのか、または必要でないのか等を話し合う。**

- ・自分達が知りたい、または検索したい図書情報（データベースの項目）とはどのようなものかを考えてみる。

- ・どのような情報があれば、本が探しやすくなるのか、また学校独自のものが出来上がるのかなど、自由な発想で意見を出し合いたい。

- ・また、ISBN の意味や、出版社、作者などについては、インターネット等で再び調べさせてもいいだろう。

- ・さらに、「データ入力者」を記入することによって、自分の登録する情報に責任を持たせることができるようになると考えられる。ぜひ、データ入力者と感想を記入できるスペースを確保し、校内でよく本を読む子どもに自信を持たせてあげたい。また、そのような子どもの発信が、これから本を読もうと思っている子どもに多いに参考となるだろう。学級図書が多数ある場合は、まず学級図書を取り上げてから活動をはじめるとも考えられる。

STEP 3 <データベースに登録したい本をピックアップしてデータ入力！>

- データベースに登録したい本をピックアップする。**

- ・できるだけ、本への思い入れを強めるために、いままで読んだ本をピックアップして数行の感想を付け加えて入力していきたい。しかし、実情は1冊の本も読んだことがない子どもたちが大半である場合が予想できる。そのようなときは、こどもたちの会話に注目し、「こんな本が図書室にあったんだ！」という気づきを重視して、「その本を借りて実際に読んでみようよ！」という呼びかけなどが必要であろう。

- ・どうしても子どもたちが避けるような文学書や文庫本などの情報を率先して扱うのは、教師や地域の人々、保護者の方々の役割であろう。しっかりと感想やおすすめポイントを記入して、本に対する知識を子ども達の前で表して欲しい。子ども達と一緒に図書室で本を広げて、大人と子どもがめいめいの思いを語る機会など稀であり、ゆっくりと時間をかけて取り組みたい場面である。また、保護者にとっても、学校にはどのような本があって、子ども達がどのように利用しているのかということを理解することができる。

- コンピュータへ図書情報を入力する。**

- ・子ども達は、分散して活動しているように思えるであろうが、最終的には各自が入力する情報が1つのデータベースに統合されて、みんなで活用できるということを常に意識させて、「共同作業」であることを強調しておく。

- ・ワークシートに記入できた子どもから、表計算ソフトへデータ入力をしていくが、雛型ファイルを作成

しておく必要がある。これには、入力するエリアを確実にして、データベースへの登録・編間作業を簡略化する必要がある。

- ・活動に余裕があれば、登録する本の表紙写真を撮影させてもよい。データベースに、表紙写真があると、その本に対してのイメージが沸きやすく、実際に探す場合にもみつけやすい。ただ、画像情報の扱いに関しては、各学校で状況が大きくことなると思われるので、各校の情報環境（特にデジタルカメラで撮影した画像情報の扱い）の現状に合わせて、どの程度まで行うかを検討していただきたい。

- ・基本的には個人単位の活動となるが、子ども達の活動状況や機材の数量に応じて、グループを編成して、ワークシートへの記入・コンピュータへのデータ入力・表紙写真の撮影とコンピュータへの画像情報の取り込み等を分担するなど、適切な活動を設定する必要がある。

○技術面での諸注意

実際には、この時点において、子ども達の入力したファイルを集計して、データベースに変換する作業が入る。本実践の記録を参照していただければわかりますが、今回は、変換したデータベースを簡単に校内 LAN にて web 形式で公開し、web 上で情報検索や情報の変更・追加ができる本格的なデータベースソフトを利用している。しかし、このような取り組み過程を重視するのであれば、特にデータベースソフトを使用しなくても、表計算ファイルのままで並び替えや検索が可能であり、コンピュータとしてのそのような機能を体験して理解するのには十分である。また、1冊の本情報を1通の電子メールとして送ってもらい、その「図書情報メール集」内で検索・並び替えも可能である。本格的なデータベースソフトの利用をすすめるが、学校の情報環境の実情や取り組みの意図によって、様々な方法を選択していただきたい。

STEP 4 <おすすめ図書データベースを使ってみよう！>

○様々な検索方法を試してみよう。

- ・情報は、デジタル化することによって、目的に応じて瞬時に選び出したり、並び替えたり、加工・修正が容易であったりと、紙上とは大きく異なる利便性があることに気づかせたい。

○みんなで検索条件の例題を出し合ってみよう

- ・「○○の文字を含む」、「～以上～以下」などによる、検索結果の違いや、多重に検索項目を設定した場合の結果の違い等、様々な検索パターンを見極めることによって、データベースの特性を知り、目的の情報を確実に得るための検索技術を習得します。

- ・検索方法の習得は、子ども達が思考錯誤する場面であり、何度も検索パターンを試していきたい。まず、自分が入力したデータがきちんと入っているか確認して、自分がデータベースの一部分を担ったんだという意識を持たせたい。そして、表示したい図書情報を限定して、みんなで検索方法を考える場面や、クイズ形式で探し出す本の条件を指定したり、課題を設定したりして、情報検索を試してみるのもいいだろう。

○ **他にどんなデータベースがあれば便利なのか、意見を出し合う。**

・日常生活の中でも、あらゆる分野でデータベースが活用されているということ、そしてその役割や必要性についての理解を深めたい。

○ **データベース完成後の継続的利用**

・活動終了後は、図書室にコンピュータを置いて、実際の運用を行っていきたい。また、新刊図書の情報入力などを図書委員会が役割分担して入力していくような取り組みを行ったり、図書の本の返却時に、一言感想を書いてもらって、その場でデータベースに登録していくなど、日常的且つ継続的な取り組みを考えて行きたい。

・校内 LAN や校内サーバーのある学校では、コンピュータールーム、各教室、職員室などから図書情報の検索ができるようにしておきたい。